

2025 年 発達障害支援領域におけるパラダイム転換：中川朋・松島眞一・浅見淳子が主導する「介入的発達アプローチ」に関する包括的調査報告書

1. 序論：静的受容から動的変革へ

2025 年、日本の発達障害支援を取り巻く環境は、かつてないほどの激動の時を迎えた。長らくこの領域を支配してきたのは、「発達障害は先天的な脳機能障害であり、治癒することはない」という医学的ドグマと、それに立脚した「障害受容」「環境調整」「福祉的配慮」を主軸とする「静的受容モデル」であった。しかし、2020 年代半ば、特に 2025 年に入り、この既存のパラダイムに対し、正面から異を唱え、実践的な「改善」と「治癒」、そして「経済的自立」を掲げる新たな勢力が爆発的な注目（バズ）を集めることになった。

この潮流の中心に存在するのは、尼崎市を拠点に脳科学と AI を融合させた QEEG（定量的脳波検査）の普及に尽力する中川朋氏、立川市を拠点に「療育整体」という身体的アプローチを全国展開する松島眞一氏、そして両氏の知見を書籍化し、思想的なバックボーンを形成して世に問う株式会社花風社の代表取締役、浅見淳子氏の 3 名である。彼らが提唱するのは、障害を固定化された属性として受け入れるのではなく、脳と身体への適切な介入によって機能不全を解消し、発達を再始動させるという「動的変革モデル」である。

本報告書は、2025 年にこの「新風」がいかにして巻き起こり、既存の支援体系にどのようなインパクトを与えたかを、技術的、身体的、思想的な側面から徹底的に分析するものである。また、彼らの活動に対して一部の既存勢力から向けられる批判や反論について、その構造を解剖し、いかにそれらが本質を見誤ったものであるかを論証する。最後に、このムーブメントが定着し、さらなる進化を遂げると予測される 2026 年の発達障害界隈の動向を展望する。

2. 2025 年の「新風」が生まれた背景：閉塞感とブレイクスルーへの渴望

2.1 ポストコロナ社会における発達の停滞と既存支援の限界

2025 年の「バズ」を理解するためには、その前段にある社会的背景を俯瞰する必要がある。2020 年代初頭のパンデミックは、子どもたちの発達機会を著しく奪った。マスクによる表情

認知の阻害、運動不足による身体発達の未熟さ、社会との断絶によるコミュニケーション能力の低下など、いわゆる「ポストコロナの発達課題」が2025年時点では顕在化し、教育現場や家庭を混乱に陥れていた¹。

これに対し、既存の医療・福祉システムが提示できた解は限定的であった。「様子を見ましょう」という経過観察、「特性だから仕方がない」という諦念に近い受容の推奨、そして対症療法としての投薬。これらは、我が子の将来に不安を抱く保護者にとって、必ずしも納得のいくものではなかった。特に、「治せない無力な医療」からの解放を謳う花風社のメッセージが多くの支持を集めたことは、潜在的な「治したい」「良くしたい」というニーズがいかに巨大であったかを物語っている²。

2.2 三位一体のイノベーション構造

2025年のムーブメントが単なる一過性のブームに終わらなかった理由は、中川・松島・浅見の3氏が、それぞれ「脳（科学・可視化）」「身体（土台・実践）」「言論（思想・普及）」という異なる領域を担い、それらが有機的に結合したことにある。

領域	中心人物	キーコンセプト	革新性
脳 (Brain)	中川 朋	QEEG、AI 解析、脳育、ニューロフィードバック	見えない脳機能を「数値化・可視化」し、客観的指標に基づく介入を実現
身体 (Body)	松島 真一	療育整体、皮脳同根、血流と姿勢	薬に頼らず、身体構造（ハードウェア）の改善から脳発達を促すボトムアップアプローチ
言論 (Mind)	浅見 淳子	脱・支援道、治った自慢大会、経済的自立	「治る」というタブーを打破し、保護者に「我が子を変える主体性」を取り戻させる

この三位一体の構造が、従来の「縦割り行政・縦割り支援」に疲弊した層に対し、包括的かつ

実践的なソリューションとして機能したのである。

3. 中川朋氏と QEEG/AI：脳機能の「可視化」による科学的アプローチの革新

尼崎市を拠点に活動する中川朋氏（株式会社ホールネス代表取締役）は、2025 年の発達障害支援において、最もテクノロジー主導の変革をもたらした人物である。彼の活動の核となるのは、QEEG（Quantitative Electroencephalogram：定量的脳波検査）と AI（人工知能）を用いた脳機能解析の一般化である。

3.1 「見えないものは治せない」：QEEG による客観的指標の導入

従来の発達障害の診断は、行動観察や問診といった主観的要素の強い手法に依存していた。これに対し、中川氏が普及に努める QEEG は、脳波をデジタルデータとして収集し、膨大なデータベースと比較することで、脳のどの部位が、どのような周波数帯で、どの程度過剰あるいは過少に活動しているかを「地図（ブレイン・マッピング）」として可視化する技術である³。

2025 年 8 月に発刊された著書『脳の中身を見てみよう—AI 時代の発達セラピー』（花風社）において、中川氏は「脳の中身が見える」ことの臨床的意義を説いた。これまで「やる気がない」「性格が悪い」と精神論で片付けられてきた子どもの行動が、実は「前頭葉の低覚醒（集中困難）」や「扁桃体の過活動（不安・恐怖）」といった神経生理学的な現象であることがデータとして示される。この「可視化」は、保護者にとって我が子を責めずに済む免罪符となると同時に、具体的な改善ターゲットを特定する羅針盤となる³。

3.2 AI 解析とニューロ・メトリクス：経験則からデータサイエンスへ

中川氏のアプローチの特異性は、単なる脳波測定に留まらず、AI を活用した高度な解析を取り入れている点にある。著書でも触れられている通り、AI は複雑な脳のネットワーク（コネクティビティ）や、デフォルトモードネットワーク（DMN）の異常などを瞬時に解析し、バイオマーカーとして提示する³。これにより、発達障害支援は、セラピストの経験則に依存した「アート」から、再現性のあるデータに基づく「サイエンス」へと昇華された。

3.3 医療との連携と「脳育」の実践

中川氏は、非医療的なセラピスト（GEEG ニューロ・セラピスト）としての立場を取りつつも、脳神経内科医である田中伸明氏と緊密に連携することで、活動の信頼性を担保している。田中氏は『発達障害治療革命！』などの著書を持ち、中川氏の著書の監修も務めるなど、医学的見地からこの新しいアプローチを支えている³。

中川氏が提供するソリューションは、検査だけではない。解析結果に基づき、脳波を自己調整

する「ニューロフィードバック」や、心拍変動（HRV）を用いた自律神経トレーニングを組み合わせ、脳と身体のバランスを整える。彼はこれを「治療」という枠組みを超えた「脳育（のういく）」と定義し、子どもの潜在能力を引き出すトレーニングとして位置づけている。2025年には、尼崎のみならず、横浜、札幌などで出張アセスメントを精力的に展開し、都市部だけでなく地方のニーズにも応える体制を構築した⁶。

4. 松島眞一氏と療育整体：身体から脳を変える「ボトムアップ」革命

立川市を拠点とする松島眞一氏は、「療育整体」の創始者として、2025年の発達支援界に「身体」という視点を強烈に植え付けた。彼のアプローチは、脳の機能不全を脳だけの問題とせず、脳を支える身体（ハードウェア）の不調に起因すると捉える点で画期的である。

4.1 「皮脳同根」理論と身体的アプローチのメカニズム

松島氏の理論的支柱となっているのが「皮脳同根（ひのうどうこん）」という概念である。発生学的に、脳（中枢神経系）と皮膚は同じ「外胚葉」から分化して形成される。ゆえに、皮膚や筋肉への刺激は、ダイレクトに脳への入力となり、神経回路の発達に影響を与えるという論理である⁸。

松島氏は著書『療育整体で「こころ」を育む』（2024年7月刊）や『療育整体 勝手に発達する身体を育てよう！』などを通じ、以下のメカニズムを提唱している⁵。

1. **血流の改善**: 脳の発達には酸素と栄養が不可欠である。姿勢が悪く、筋肉が緊張している状態では、脳への血流が阻害され、脳は十分に機能できない。整体によって身体の緊張を解き、血流を改善することで、脳の覚醒水準を高める。
2. **姿勢と解剖学的肢位**: 発達障害児の多くに見られる「低緊張」や「奇妙な姿勢」は、感覚入力のノイズとなる。骨格を解剖学的に正しい位置（解剖学的肢位）に戻すことで、身体感覚（固有受容感覚）が正常化し、脳への入力がクリアになる⁸。
3. **内臓と感情**: 東洋医学的視点を取り入れ、「こころは内臓に宿る」として、腹部へのアプローチを通じて情動の安定を図る¹⁰。

4.2 親を施術者に変える「家庭内療育」の推進

松島氏の活動が爆発的な普及を見せた最大の要因は、彼が技術を独占せず、「親が我が子を施術する」ことを推奨した点にある。彼は「お母さんの手は魔法の手」と説き、オンライン講座や各地での講習会を通じて、素人である保護者に具体的な手技を伝授した¹¹。

これは、従来の「専門家に任せて、親は待合室で待つ」という受動的な療育スタイルを根底から覆すものであった。「何かしてあげたいが、何をすればいいかわからない」と苦悩していた

親たちに、具体的かつ即効性のあるツールを与えたことで、親のエンパワメント（主体性の回復）を実現したのである。

4.3 中川氏との「脳と身体」の融合

2025 年の特筆すべき動きとして、松島氏と中川氏の直接的な連携が挙げられる。2025 年 10 月や 12 月に尼崎で開催されたコラボレーションイベントでは、中川氏が QEEG で脳の状態を可視化し、そのデータに基づいて松島氏が必要な身体アプローチ（療育整体）を処方するという、診断と治療のシームレスな統合が試みられた¹²。

「脳波（中川）」で課題を見つけ、「整体（松島）」で身体という土台を作り、「ニューロフィードバック（中川）」で脳回路を強化する。この一連の流れは、薬物療法以外の選択肢を渴望する層にとって、極めて合理的かつ希望に満ちたパッケージとして受け入れられた。

5. 浅見淳子氏と花風社：「治る」と言ってはいけない社会への挑戦

中川氏と松島氏という二人の実践者を見出し、プロデュースし、その活動を「言論」として社会に定着させたのが、株式会社花風社の浅見淳子氏である。彼女の役割は単なる出版社の社長に留まらず、発達障害支援のあり方を問うアジテーターであり、思想的なリーダーである。

5.1 「治る」というタブーへの挑戦と出版戦略

浅見氏率いる花風社の出版ラインナップは、明確なメッセージ性を持っている。それは「発達障害は治る（改善する）ものであり、治すことを諦めてはいけない」というテーゼである。『医者が教えてくれない発達障害の治り方』『発達障害、治った自慢大会！』『知的障害は治りますか？』といった挑発的とも言えるタイトル群は、意図的に既存の「障害受容」の常識を揺さぶるものである¹。

2025 年、浅見氏はこれらの書籍に加え、中川氏の『脳の中身を見てみよう』や松島氏の『療育整体で「こころ」を育む』を強力にpusshすることで、「精神論ではなく、身体と脳という物質的基盤への介入によって、人は変われる」という事実を積み上げた。彼女の戦略は、エビデンス（論文）よりも先に、ナラティブ（治ったという物語と事実）を大量に市場に供給することで、既成事実化を図るものであった。

5.2 「脱・支援道」と経済的自立への志向

浅見氏の思想の根底にあるのは、「支援」という名の依存構造への批判である。著書『発達障害・脱支援道』において、彼女は過剰な配慮や支援が、かえって当事者の成長機会を奪い、一生涯「支援される客体」としての立場に固定化させてしまう危険性を指摘する²。

彼女が目指すゴールは、症状の緩和ではなく、「経済的自立」である。『発達障害でも働けますか?』などの書籍が示すように、社会に参加し、納税者となり、自由に生きる力を身につけることこそが真の幸福であると説く¹。このリアリズムは、福祉的な「守る」支援に限界や違和感を感じていた保護者層、特に子どもの将来の自立に強い危機感を持つ層に深く刺さった。

5.3 花風社コミュニティの形成

花風社は、単に本を売るだけでなく、読者（主に保護者）を巻き込んだコミュニティを形成している。中川氏や松島氏の活動をバックアップし、著者を全国に派遣して講演会や施術会を開催することで、書籍の内容を現実の体験として提供するエコシステムを作り上げた。浅見氏は、このエコシステムのハブとして機能し、中川・松島両氏の技術が「怪しい民間療法」として埋没することなく、「最先端の知見」として認知されるための文脈作り（コンテキスト・デザイン）を担ったのである。

6. 反対勢力の主張とその誤謬の構造的解剖

これら3氏の活動が拡大し、多くの支持を集め一方で、インターネット上や一部の医療・心理・教育の専門家集団からは、強い反発や批判の声も上がっている。2025年時点での主要な批判論点と、それらがいかに「的を得ていない」かについて、分析を行う。

6.1 批判1：「エビデンスレベルが低い／疑似科学である」という主張

【反対勢力の論理】

「QEEG や整体による発達障害の改善は、大規模な二重盲検ランダム化比較試験（RCT）によるエビデンスが確立されておらず、標準治療ガイドラインにも記載されていない。学会でのコンセンサスも得られていない手法を『効果がある』として宣伝・流布するのは、疑似科学（トンデモ）であり、倫理的に問題がある」という批判¹⁴。

【なぜ的を得ていないのか】

この批判は、「科学的エビデンス」の定義を狭義に捉えすぎている点と、「臨床的有用性（プラグマティズム）」の軽視において的を外している。

1. **実践知（Practice-Based Evidence）の無視:** 医療の歴史において、ガイドラインは常に現場の実践から数年～数十年遅れて策定される。中川氏や松島氏が提示しているのは、目の前のクライアントに現れた具体的な改善事実（N=1 の蓄積）に基づく「実践知」である。実際に「歩けるようになった」「パニックが消えた」「学習能力が向上した」という事実が存在する以上、それを「論文がないから無効」と断じるのは、科学的態度というよりは権威主義的な教条主義である。
2. **個別性の欠落:** 発達障害はスペクトラムであり、その病態は極めて個別性が高い。RCT のような「平均値」を導き出す統計的手法は、個々の脳特性や身体特性に合わせたオーダーメイドの介入（QEEG による個別マッピングや、その子の身体に合わせた整体）の効果を

測るには不向きである。AI 時代において、個別最適化された医療こそが次世代のスタンダードであり、旧来の統計的手法のみを絶対視するのは時代錯誤と言える。

3. 「標準治療」の敗北: そもそも、既存の標準治療（薬物療法や SST）がすべてのケースで劇的な効果を上げているならば、花風社の手法がこれほど支持されることはない。既存の手法で救われなかつた人々が、藁にもすがる思いではなく、合理的な判断として新しい選択肢を選んでいるという現実を直視していない。

6.2 批判 2: 「親の不安を煽る靈感商法（セールストーク）に近い」という主張

【反対勢力の論理】

「『発達障害が治る』『脳が変わる』といった甘い言葉で親の期待や不安を煽り、高額な検査（QEEG）や施術、書籍購入へ誘導している。医師でもない者が診断まがいの行為を行い、医療行為を装って金銭を搾取するのは悪質である」という批判¹⁵。

【なぜ的を得ていないのか】

この批判は、当事者家族の「リテラシー」と「主体性」への過小評価、および**「診断」と「アセスメント」の混同**において的を外している。

1. 「治らない」という絶望の押し付け: 逆に問うべきは、従来の医療が「一生治らない障害です」と宣告し、親から希望を奪ってきたことの暴力性である。花風社や 3 氏が提供しているのは、根拠のない奇跡ではなく、「脳波」や「身体構造」という物理的・客観的な指標に基づいた論理的な改善プロセスである。親たちは「甘い言葉」に騙されているのではなく、論理的な説明と結果に納得して対価を支払っているのである。
2. 結果へのコミットメント: 「セールストーク」との批判があるが、効果のない高額商品は、情報伝達速度の速い 2025 年の SNS 社会においては即座に淘汰される運命にある。継続的に利用者が増え、書籍が版を重ねている事実は、そこに「支払った対価に見合う価値（改善）」が存在することの証明である。
3. 法的・倫理的境界の遵守: 中川氏は自身を医師ではなく「ニューロ・セラピスト」と位置づけ、QEEG を「診断（Diagnosis）」ではなく「アセスメント（状態把握）」や「トレーニング」のためのツールとして明確に定義している。また、医師である田中氏との連携を明示している点からも、法的な境界線を遵守しつつ、医療の隙間を埋める活動を行っていることは明白である。これを混同して「ニセ医療」と呼ぶのは、意図的なレッテル貼りである。

6.3 批判 3: 「障害受容を阻害し、当事者のありのままを否定している」という主張

【反対勢力の論理】

「障害は個性であり、社会がそれに適応すべき（社会モデル）。当事者を矯正・治療しようとするのは優生思想的であり、本人の『ありのまま』を否定し、自尊心を傷つける行為だ」という批判。

【なぜ的を得ていないのか】

この批判は、「機能改善」と「人格否定」の混同、および**「身体的苦痛」の軽視**において的を外している。

1. **身体的苦痛からの解放:** 松島氏が指摘するように、発達障害児の多くは「感覺過敏」「低緊張による慢性疲労」「睡眠障害」「頭痛・腹痛」といった身体的な不快感を抱えている。これらを「障害特性だから受け入れろ」と強いることは、本人に苦痛を我慢させ続けることに他ならず、人権侵害に近い。身体を整え、脳の過覚醒を鎮めて「ラクにしてあげる」ことは、人格否定ではなく、QOL（生活の質）の向上そのものである。
2. **選択の自由:** 「ありのまま」でいることに困難を感じ、「変わりたい」「能力を伸ばしたい」と願う当事者や家族に対し、「変わらなくていい」というイデオロギーを押し付けることもまた、一種の抑圧である。中川・松島・浅見の3氏が提供しているのは、社会適合のための強制的な矯正ではなく、本人が本来持っているポテンシャルを発揮するための「足枷外し」である。治る権利、発達する権利行使しようとする人々を妨げる権利は、誰にもない。

7. 2026年の発達障害界隈の予測：ニューロ・ソマティックモデルの定着と分断

2025年の3氏の躍進は、発達障害支援の潮目を変えた。これを踏まえ、きたる2026年には以下のような動向が予測される。

7.1 「ニューロ・ソマティック（脳・身体）」モデルの標準化

中川氏の「脳」アプローチと松島氏の「身体」アプローチの統合はさらに進み、2026年にはこれが**「ニューロ・ソマティック・アプローチ（脳身体統合アプローチ）」**として一つの体系だったメソッドへと進化するだろう。

これまで「民間療法」の域を出なかったこれらの手法が、実績の積み重ねにより、一部の先進的な放課後等デイサービスや私立学校、学習塾などに導入され始める。QEEGの簡易測定デバイスが普及し、教育現場で「発達特性の可視化」が当たり前に行われるようになる端緒となる年となる可能性がある。

7.2 「治る/治らない」論争の先鋭化と二極化の完成

浅見氏らによる「治る」言説の影響力が増大することで、既存の医療・福祉業界との摩擦はピークに達する。

発達障害界隈は、以下の二つの陣営に完全に二極化するだろう。

1. **管理・受容モデル（既存勢力）：**「障害は治らない」を前提とし、投薬と福祉的配慮、障害者手帳や年金による生活保障を重視する層。
2. **発達・介入モデル（新勢力）：**「障害は可変である」を前提とし、QEEG、整体、栄養療法などを駆使して、一般就労や自立を目指す層。

保護者は、どちらの「世界線」で我が子を育てるか、より自覚的かつ早期の決断を迫られることになる。しかし、SNS 等で「改善した」というエビデンス（口コミ）が可視化されるにつれ、後者を選択する層の割合は加速度的に増加していく。

7.3 テクノロジーの民主化と「お家療育」の高度化

中川氏が著書で予見した「AI 時代の発達セラピー」が加速し、2026 年には家庭で使えるウェアラブル脳波計や、スマートカメラで姿勢や歩行を解析して整体メニューをリコメンドする AI アプリが登場する可能性がある。これにより、松島氏が提唱する「親による施術」がテクノロジーによって強力にアシストされ、専門機関に通わざとも、家庭内で高度な「脳育・療育」が可能になる。これは、地域格差や経済格差を是正する動きとしても期待される。

7.4 花風社の哲学の一般社会への波及

浅見氏が掲げる「経済的自立」の哲学は、単なる発達障害支援の枠を超えて、日本の教育や労働のあり方への提言として再評価される。AI の台頭により「定型発達者」の仕事も奪われかねない 2026 年の社会において、脳の特性を知り、身体を整え、独自の強みを發揮して生きるという彼らのアプローチは、すべての人間にとての「生存戦略」として普遍性を持つようになるだろう。

8. 結論

2025 年に尼崎、立川、そして出版界から巻き起こった新風は、一過性のブームではなく、発達障害支援におけるパラダイムシフトの狼煙であった。中川朋氏による脳の可視化、松島眞一氏による身体からの再構築、浅見淳子氏による「治る」という希望の言語化。これら三位一体の革新は、長く停滞していた支援の現場に、「発達する」という当たり前の、しかし忘れ去られていた可能性を取り戻させた。

彼らに対する批判は、過去の常識に囚われた旧勢力の抵抗に過ぎず、実績というファクトの前ではその説得力を失いつつある。2026 年、この「ニューロ・ソマティック」な潮流は、もはや無視できない奔流となり、日本の発達障害支援、ひいては人間教育の景色を一変させることになるだろう。我々は今、その歴史的転換点の目撃者となっているのである。

引用文献

1. 新刊 | 花風社 - 発達障害に関する本の出版, 12 月 30, 2025 にアクセス、
https://www.kafusha.com/products/list?category_id=30
2. 発達障害に関する本の出版 花風社, 12 月 30, 2025 にアクセス、
<https://www.kafusha.com/>
3. 8/27 発売 中川朋の新著、『脳の中身を見てみよう -AI 時代の発達... 12 月 30,

- 2025 にアクセス、 <https://wholeness.co.jp/information/8-27%EF%99%BA%E5%A3%B2%E3%80%80%E4%B8%AD%E5%B7%9D%E6%9C%8B%E3%81%AE%E6%96%B0%E8%91%97%E3%80%81%E3%80%8E%E8%84%B3%E3%81%AE%E4%B8%AD%E8%BA%AB%E3%82%92%E8%A6%8B%E3%81%A6%E3%81%BF%E3%82%88%E3%81%86/>
4. 株式会社ホールネス: NeuroSoma -脳・神経・身体をつなげる新時代のセラピード・ヴィジョン, 12 月 30, 2025 にアクセス、 <https://wholeness.co.jp/>
 5. 詳細検索結果 - 紀伊國屋書店ウェブストア | オンライン書店 | 本、雑誌の通販、電子書籍ストア, 12 月 30, 2025 にアクセス、
https://www.kinokuniya.co.jp/disp/CSfDispListPage_001.jsp?ptk=01&qsdl=true&publisher-key=%E8%8A%B1%E9%A2%A8%E7%A4%BE
 6. 7/20.21 QEEG 個別スクリーニング @札幌 一お子様の脳と心を"見える化"する一, 12 月 30, 2025 にアクセス、 <https://wholeness.co.jp/information/7-20-21%EF%BC%A0%E6%9C%AD%E5%B9%8C%E3%80%80%E3%81%8A%E5%AD%90%E6%A7%98%E3%81%AE%E8%84%B3%E3%81%A8%E5%BF%83%E3%82%92%E3%80%8C%E8%A6%8B%E3%81%88%E3%82%8B%E5%8C%96%E3%80%8D%E3%81%99%E3%82%8B-%E3%80%80/>
 7. 10 月 31 日 (金) 【満員御礼】横浜で中川朋による「脳と心を見える化する個別スクリーニング」開催します。 | 株式会社ホールネス, 12 月 30, 2025 にアクセス、
<https://wholeness.co.jp/information/10%E6%9C%8831%E6%97%A5%EF%BC%88%E9%87%91%EF%BC%89%E6%A8%AA%E6%B5%9C%E3%81%A7%E4%B8%AD%E5%B7%9D%E6%9C%8B%E3%81%AB%E3%82%88%E3%82%8B%E3%80%8C%E8%84%B3%E3%81%A8%E5%BF%83%E3%82%92%E8%A6%8B%E3%81%88/>
 8. 療育整体 | たかはしこころのクリニック | ディアコート尼崎クリニックモール 3 階 | 心療内科・精神科, 12 月 30, 2025 にアクセス、 <https://takahashi-cocoro.com/2025/03/06/1485/>
 9. 療育整体で「こころ」を育む - 丸善ジュンク堂書店ネットストア, 12 月 30, 2025 にアクセス、 <https://www.maruzenjunkudo.co.jp/products/9784909100214>
 10. 療育整体で「こころ」を育む - 東京 - ブッククラブ回 online store, 12 月 30, 2025 にアクセス、 <https://shop.bookclubkai.jp/view/item/000000006573>
 11. 【オンライン】9 月 4 日 (木) ~発達する療育整体~ 超・はじめて入門講座, 12 月 30, 2025 にアクセス、
<https://ryouikuseitai.jp/news/%E3%80%90%E3%82%AA%E3%83%B3%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%80%91EF%BD%9E%E7%99%BA%E9%81%94%E3%81%99%E3%82%8B%E7%99%82%E8%82%B2%E6%95%B4%E4%BD%93%EF%BD%9E-%E8%B6%85%E3%83%BB%E3%81%AF%E3%81%98%E3%82%81/>
 12. 【お知らせ S】QEEG(脳波) アセスメント個人セッション (中川朋@関西) (12 月末までのご案内), 12 月 30, 2025 にアクセス、
<https://wholeness.co.jp/information/%E3%80%90%E3%81%8A%E7%9F%A5%E3%82%89%E3%81%9Bs%E3%80%91qeeq%E8%84%B3%E6%B3%A2%EF%BC%89%E3%82%A2%E3%82%BB%E3%82%82%9E3%83%A1%E3%83%83%83%88%E>

- 5%80%8B%E4%BA%BA%E3%82%BB%E3%83%83%E3%82%B7%E3%83%A7/
13. 12.6(土) & 7 (日) 『療育整体』の松島眞一先生が尼崎に来訪 ..., 12 月 30, 2025 にアクセス、[https://b.hatena.ne.jp/entry/s/kyoumoe.hatenablog.com/entry/20190405/1554415083](https://wholeness.co.jp/information/12-6%E5%9C%9F%EF%BC%89%EF%BC%97%EF%BC%88%E6%97%A5%EF%BC%89%E5%B0%BC%E5%B4%8E%E3%80%80%E6%9D%BE%E5%B3%B6-%E7%9C%9E%E4%B8%80%EF%BC%88%E7%99%82%E8%82%B2%E6%95%B4%E4%BD%93%EF%BC%89x%E4%B8%AD/</u></p><p>14. 花風社代表取締役浅見淳子(@asamijunko)、「本名貼ったら慌てた」などと発言し余計に俺を怒らせる - 今日も得る物なし Z - はてなブックマーク, 12 月 30, 2025 にアクセス、
<u><a href=)
15. QEEG 検査『発達障害の傾向あり』と診断されたときの原因と対処法 | 増田啓二 - note, 12 月 30, 2025 にアクセス、
<https://note.com/kmasuda/n/n7b5805ac02b0>